

# 「俺は逃げない」

宮本泰勇さん（49歳）

〒307-0001 茨城県結城市結城6884  
☎0298-33-2328

## プロフィール

昭和24年生。関東地方の畑作地帯でハクサイ、バレイショ、ニンジンなどを作る大規模畑作野菜中心の経営を経て、現在は花壇花中心の農業経営。今、後継者の裕司くんの後継者教育に力が入っている。



宮本泰勇さん（49歳）の経営の中心は、40aのハウスと露地畑30aで行なう年間約40万ポットの花壇花の生産である。労働力は、今、宮本さんの元で後継者として修業中の息子の裕司君（22歳）と父上。常時3〜4人のパートも雇用している。

畑では、ニンジンとバレイショも2haずつ作っている。その他、市役所に頼まれて街路樹の防除作業を裕司君の仲間の農業後継者たちとともに請負ったりもする。

花壇花を始めたのは約5年前。以前はハクサイを中心とした10haを越す大規模畑作野菜作経営だった。

ハクサイで数千万円というレベルの収益を上げることもあったが目論見がはずれることもあった。そんな備けも大きいリスクもある経営から、安定的な収益を上げる花壇花を経営のベースにしようと考えてのことだ。また、常に新たなテーマにチャレンジする父親の姿を子供に見せておきたいという

こともあったようだ。しかし、安定収入を狙った花壇花生産も、春先の休日に雨の日が多いと需要は落ちるそう

だ。  
宮本さんは、裕司君が成長するにつれて、若かった頃に父親とは違う経営や生き方を求めていた自分のことを思い出すようになった。一人前の大人になろうとしている後継者に残すべき物、親として伝えるべきこと、伝えることのできることは何なのかを考えるようになった。宮本さん自身が、当時の父親の世代になったのだ。

宮本さんは言う。

「残すべきは『土』。そして伝えるべきことは『俺は逃げない』という自分の生き様そのものしかないのではないかと。」

## いじめられっ子だった日々

高校1年の最初の頃まで、宮本さんはいじめられっ子だった。子供時代は「泣き泰」と仇名が付くほどの泣き虫だった。「逃げること」「負けること」が習性になっていった。人前で話もできず、喧嘩をしても相手の痛さを思うと殴れなかった。そんな躊躇の間に殴られていた。優しい子供だった。

しかし、そんな宮本さんの生き方が変わったのは高校1年の春だった。

ある日、上級生からの恐喝を受けたが、それをはっきりと拒絶した。そんな拒否の言葉を口に出せたのは初めてのことだった。それまでの宮本さんは、痛い思いをすることを避けて強い者の言に従ったり、ただ泣きながら悔しさを我慢してきたのだ。しかし、なぜかその時、宮本さんは

「今逃げたら、俺は一生逃げ続ける」  
と思った。そして、殴られても構わないと思えたのだ。

宮本さんのいつもと違う拒絶にひるんだのか、上級生は暴力を振るうこともなく、その後は嚇しを受けることも無くなった。

宮本さんの変化には伏線があった。

宮本さんはいつも、駄目な奴、高校

なんか入れないと言われ続けてきた。

桑苗の暴落による家の経済状態も知っ

ていた。それでも高校進学を願い、それまでしたこともなかった勉強もして、無理といわれた高校に合格したのだ。それは、生まれて初めて誰の指図でもない自分が決めた選択だった。

後で振り返ればいかにも些細な事柄であつても、自らの意志で何かを実践し、その体験や成功の実感を通してこそ、人は何事かに気付き成長していくのだ。そんな小さな人生の「挑戦」と「成功」が宮本さんを変えていった。

身に降りかかる困難に耐えて我慢する生き方ではなく、どんなに殴られても、格好が悪くても、自分の意志を通すために辛抱する。夢を持ち、意志を持つことで、人は自ら生まれ直すことができるのだ。

以来、「逃げたら負けだ」「格好悪くても逃げなければ負けではない」と考

えるようになった。その

場の喧嘩の勝ち負け

が問題なのではない。

人生の勝ち負けは他人

と争うことではないの

だ。他人に負けるので

はなく、自分自身から

逃げるのが人生の敗

北なのだ。そして「変

えようと思えば自分も

変えられるし、自ら信

じて思い続けられるこ

とは実現する」のだと  
いうことも、その経験  
から学んだことだった。

## 「良い子ならいいの か？」

宮本さんは高校を卒業すると、父親に自分  
なりの野菜作りをさせ  
て貰うことを頼んだ。

それから数年の間、家  
の仕事の合間に小さい  
ながらも任された自分  
の畑で、見よう見真似  
の野菜を作り、地場の  
市場で売ってみた。ナ  
スを植えてトマトには

ならなかったというレ  
ベルの野菜はできたが、その結果は、  
海千山千の業者に買い叩かれて散々な  
ものだった。売れても経費を考えれば  
赤字だった。悔しかった。でも、父は  
その売上を宮本さんのものにしてくれ  
た。始めから教育のつもりだったのだ  
らう。

高校を卒業した頃の宮本家の農業  
は、それこそ7色の絵の具を使ってい  
るかのようにな多種多様な作物を作り、  
そして一年中仕事に追回されていた。  
それが農家の暮らし方だった。



実際の作業は若者任せだが、街路樹防除は大人の気遣いがないと問題も起きやすい

父親はよくここまでと思うほど勤勉  
に働き、一つ一つの作物も手抜きをせ  
ずにきちんと作っていた。

きれいに作ることに、百姓として恥ず  
かしくない生き方、暮らし方をするこ  
とにこだわっていた。でも、損得を考  
えて利益を出すこと、労働配分を考  
えて経営内容を変えて行くということは  
なかった。

当時、結城は桑苗の産地であり、剪  
定した枝を使つての養蚕をするのが一  
般的だった。無駄のない合理的なやり



一緒に街路樹防除をする裕司君（左から2人目）の友人たちと



方に見えるが、桑苗の相場は乱高下が激しかった。3年かけて販売できる桑苗木が暴落することもあった。

桑苗の伏せ込みの季節は春だった。桑の苗を作るために親株に出た新芽の茎を折り曲げ、それに土をかぶせていく作業だ。手植え時代に田植えを終えた夕方からの仕事であり、心底、へとへとだった。

それが終わると梅雨時期から夏にかけてのカンピョウ作りが待っていた。カンピョウの収穫と調整、それにハクサイの育苗、定植が重なって、これも寝る間も無いと思えるほどの忙しさだった。朝は3時頃から起き出してカンピョウを収穫し、昼は昼でその調整作業が待っていた。

秋は秋で蚕の上簇の時期だ。それはちょうど稲刈りの時期と重なっていた。1ha弱だったが手刈りの時代なので、稲はいつも刈り遅れだった。2、3反のハクサイの定植の時期とも重なった。

桑苗もカンピョウも投機的な作物で、相場はいつも乱高下していた。小

さなばくちの繰り返しで、しかも、それには心底へとへとになる労働が付きまどった。儲かった時はまだしも、相場が悪ければただお金が手に入らぬだけではない消耗感が家族を暗くさせていた。

こんなことやっついてどうなるのだろうかとかと宮本さんは考えていた。

「どんだけやったら気が済むんだ」父親と喧嘩する日もあった。

桑を止めようと言いついてから3年目のある日、宮本さんは父親に聞いた。

宮本さんが22、23歳の頃だった。

「俺は、黙って親の言い付けを守る良い息子でいればいいのか？」

それまで宮本さんは、父親に喧嘩ごしで意見を言うことはあっても、父の

言い付け通り文字通り遊ぶ暇もなく仕事をしてきた。

父は何も答えず黙っていた。

農家として生きてきた習慣を変えることはできない。それへのこだわりも

あった。でも、父親も解っていたのだ。単に過去からの習慣ではなく、農家が

自分の意志で経営を創造していく時代が始まっていることを。宮本さんの問

いに答えなかったのは「お前の時代が始まるのだ、自分の意志で生きる」と

無言で答えていたのだと気付いたのは、自分が当時の父親と同じ世代にな

ってからのことだった。

それまで3年間位、父親に向かって経営の変革を訴え続けた。同じ県内で

も他地域の同級生の家で見っていたハクサイの大規模栽培を、宮本さんは自分

の進むべき方向だと定めていた。友人の家では、宮本さんの家の3倍から5倍の面積でハクサイを作っていた。それに、友人は遊びに行ける時間もお金も持っていた。

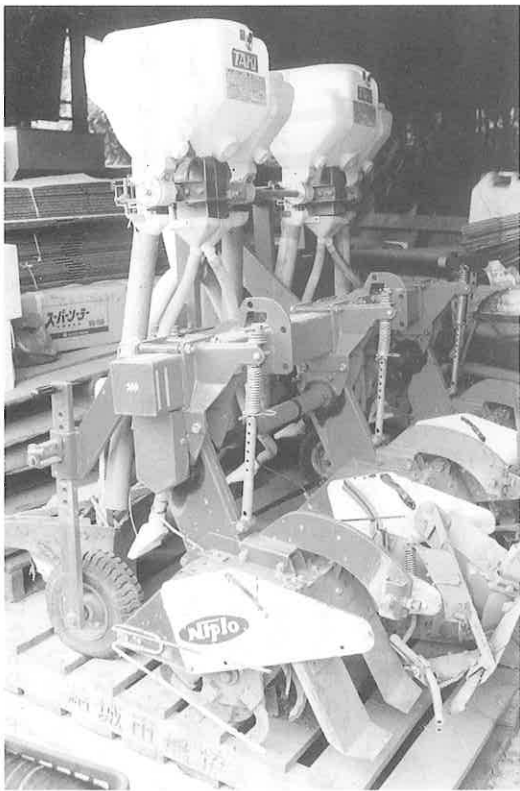
宮本さんは、まず蚕を止めようと提案した。そこは、赤土の良い畑だったからジャガイモを作った。そして、始めたハクサイの規模拡大だった。

当時だと2、3反でも大規模といわれる時代だったが、作付けを一気に1haに拡大した。

「こんなに作ってどうすんだい」

地元の人達に言われた。でも、宮本さんは地元業者に踏んだり蹴つたりにされていた時代とは違っていた。ハクサイはトラックに積んで、東京の淀橋市場に持込んだ。

地元の農家では珍しかった2tのトラックも買った。トラックよりも前だった。それも都内のナンバーを取るためにわざわざ東京に住む叔父に頼んで買ったものだった。「土浦」ではなく「足立」のナンバーを付けていた方が市場での扱いが違うと考えたのだ。東京に住む叔父の入れ知恵でもあった。今ならばかはかしいと思うかもしれないが、そんな時代だったし、それだけの思い入れをして始めたハクサイ作りの拡大であり、淀橋市場への出荷だったのだ。



北海道型の体系で栽培するバレイシヨの高畦培土用のカルチベータ

結果は大成功だった。当時の地元の  
人達から見れば1haのハクサイ作りな  
んで想像を絶する規模だったが、ほと  
んどの農家は自分の身の回りにしか目  
が届いていないことを、宮本さんはそ  
の頃に気付いた。

それまでとは売上の単位も変わってき  
た。でも、気持ちは覚めていた。こん  
なものではないという気持ちがあつた  
からだ。もし、父や地域の農家に向か  
つて「どんなもんだ」と天狗になつて  
いたのなら、宮本さんは1haのハクサ  
イ作りで終わってしまっただろう。

翌年、補助事業で当時としては大型  
のシバウラの30馬力トラクタが入って  
きた。トラクタが入って、規模拡大の  
展望も見えた。

やがて宮本さんのハクサイ作りは、  
自作だけで8haを作り、それ以外に青  
田買いの分を含めると10ha以上にまで  
規模が拡大した。時には年間で数千万  
円も利益を出すこともあった。大規模  
に畑作をやるようになると、バレイシ  
ヨやニンジンなどの機械化が可能な畑  
作野菜の経営的有意性にも気付き、北  
海道型のプランターやカルチ、培土機、  
収穫機を入れて作物の多様化も図って  
いった。目標を目指して突き進んでい  
く時代が続いた。

しかし、子供が中学校に入る頃にな  
ると、このままでよいのかと思うよう

になった。子供に譲る準備をしていか  
なければならぬと思うようになってな  
った。

子供に何を残せるのだろうか。それ  
は「土」しかなかった。

### 子供に伝えるべきこと

父が買った初めての耕耘機の時代か  
ら、宮本さんの機械力を縦横に使った  
機械化農業の時代。そして、裕司君は  
トラクタにも乗らず、自分自身は農作  
業すらしない農業経営者になる時代が  
来るのかもしれない。

自分は親父より上になつたのではな  
いかと思わないこともないが、本当は  
自分の力ではなく単に時代が変わつた  
けなのだと言本さんはいう。それでは、  
自分は父親以上に何を子供に伝えるこ  
とができるのだろうか。

自分のこれまでを振り返ってみる  
と、ガムシャラにチャレンジを続け、  
であればこそ困難にぶつかるといふ人  
生だった。ただ、困難から逃げるこ  
とだけはしなかった。成長するにつれて  
仕事が発展すればするほど、あの子供  
時代に上級生の恐喝に膝を振るわせな  
がら「俺は逃げないぞ」と心の中で誓  
つたことを思い出すことが多くなつて  
いった。それが生きていく勇気をくみ  
上げる源だったからだ。そして何より、

逃げ続けていたあの少年時代の惨めさ  
に戻りたくなかつたから。

思い通りにならないことの方が多く  
ても、他人や世の中のせいにはし  
てこなかった。いつも「俺はこうする」  
「こうすることに決めたのだ」と自分  
に言い聞かせた。「今までがどうであ  
つたかではなく、これからどうする  
か。ちよつとでも目線が上を向いてい  
れば、向上していけるのだ」。そのこ  
とを他人の前で口に出すことで自分を  
後に引けなくもさせてきた。

むしろ何をうまく成就させたといふ  
事実よりも、それを目指しての困難の  
中での辛抱や様々な出会いを含む体験  
こそが宮本さんを育ててきた。お金は



まだ、酪農家が使い出す前から麦わらを集める目的  
で使っているローラー

貯まらなかつたが、困難の中でこそ人  
生にとつての宝物といえるものを蓄え  
ることができるとだ。宮本さんの中  
にある宝とは、覚悟であり勇気であり、  
そして優しさだった。

若い頃まったく酒の飲めなかつた宮  
本さんに「酒飲めないのは男じゃない」  
とからむ者がいた。屈辱的な言葉だつ  
た。一生懸命、酒を覚えようとした時  
代もあった。でも馬鹿らしくなつて止  
めた。人にできないことをやろうとす  
ること、人が尻込みすることを敢えて  
やっていくのが男ではないかと気付い  
たからだ。

何とかしなけりやならないことがあ  
るのなら、酒はともかく、サジを向け  
られたならそれを受けてきた。

能力はなくとも、どんな役目も逃げ  
なかつた。沢山の恥もかいてきた。そ  
のこともまた宮本さんを育てたのだ。

技術や知識を別にすれば、親が子供  
に教えられることなど何も無いのだ。

人は自らの体験や自ら学ぶことを通  
して、初めて自分以外の者の経験を受  
け継げるのだ。生きて行くこととはテ  
ストやクイズに答えることとは違う。  
それぞれの人生というテーマのなかで  
人それぞれに違う答えを出して行くこ  
となのだ。答えは自分で出すしかない  
のだ。ただし、逃げなければ道は必ず  
見つかるのだ。

(昆 吉則)